「明治三二年弘前女学校卒業論文集」と津軽の私立女子教育

北原かな子

はじめに

津軽地方弘前は、明治の早い時期から私立の女子教育が盛んだった。特に明治一九年（一八八六）以降は、キリスト教メソジスト派によって設立された女学校での教育が行われ、地域の人材育成に貢献した。居留地から離れた同地方にキリスト教主義の女学校が開校した背景には、同じ弘前に明治五年に設立された私学東奥義塾の存在があった。

東奥義塾とは旧弘前藩学校の後身として開校した学校である。もともと津軽地方は、明治初年から西洋文化摂取に熱心で、東奥義塾にも草創期からプロテスタントのキリスト教宣教師を外国人教師として招聘した。中でも明治七年末から一一年初頭まで弘前に滞在したメソジスト派宣教師であるジョン・イングは、同校での在職期間も比較的長かったことから、学校内外に多岐にわたって影響力を残した。たとえばキリスト教は、イング着任の半年後に早くも洗礼を受けるものが出るなど急速に広まった。また当初宗派を問わない公会形式で設立された弘前教会も、やがてイングの属するメソジスト派に帰属し、弘前はメソジスト派の活動拠点の一つになった(1)。

こうした事情から、弘前にはキリスト教メソジスト派の影響がさまざまな点で広がったが、女子教育もその一つである。明治期弘前の女子教育は公立教育と私立教育とがあったが、東奥義塾から始まった私立女子教育は、やがて弘前女学校へと受け継がれ、同校は明治三四年に青森県立第一高等女学校が弘前に開校するまで、弘前の女子教育の要となった。特に青森県の場合、明治一一年に開校した青森県女子師範学校が同一八年に財政難から閉校となり、明治三〇年代初頭まで公立学校での女性教師育成の場がなかったことから、弘前女学校は公立初等教育機関の女性教師育成の場としても大きな役割を果たした。明治三四年の時点で卒業生の多くは弘前市内公立小学校の教師となり、市内で同校卒業生が居ないのはただ一校であると伝えられている(2)。

このように弘前女学校は、津軽地方の女子教育のみならず、公立初等教育を考える上でも重要な役割を担った学校であったが、これまで同校の明治期の教育についての研究は、学校史などを除くとそれほど多くはない(3)。特に現在弘前学院聖愛高等学校に所蔵されている明治三〇年代の論文集は、同校の本科課程の教育を受けた女性たちの意識やものの考え方を現在に伝える非常に貴重な史料になっているが、その内容はこれまでほとんど注目されてこなかった(4)。

本稿は、弘前女学校に至る弘前での私立女子教育の流れを述べるとともに、この明治三〇年代初頭の論文集のうち、明治三二年卒業論文集の紹介を中心として当時の生徒たちの意識やものの考え方を検討する。また当該生徒たちが学んだ環境や卒業後の進路などを、弘前女学校沿革資料(5)や指導に当たった女性宣教師の報告書(6)、弘前市内の公立小学校の学校日誌(7)などからあきらかにする。その上で、津軽における明治中期の私立女子教育の在り方について考察するものである。

1　明治期津軽地方における女子教育

（1）公立教育体制の開始

弘前女学校の卒業論文及び私立教育について言及するにあたって、ま

ず津軽地方における公立女子教育の概要を述べる。

明治五年（一八七二）の学制発布を受け、青森県でも小学校の設置を進めた。周知の通り、学制は「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん」ことを目的とし、学齢期に達した男女児童はすべからく小学校へ入学することを義務づけたものであったが、青森県の場合は、女子教育に関してきわめて遅れていた。就学率も低く、同じ県内の男子と比べてもさらに低かった(8)。明治一三年には青森県の男子就学率が全国平均を超えたが、女子就学率は全国の半分にも達していない。この状況は、当時の青森県における女性観、あるいは女子教育観を浮き彫りにしている。女性に必要なのは家事育児および生活に関する労働のみであり、夫や舅に仕えながら子供を育てることができればよいという考え方が根強かったものと思われる。

こうした中にあって、弘前は県内でも数少ない、女子教育体制が進んだ地域であった。県内に女子のみを教育する「女小学」が設立されるようになるのは、明治八年以降のことだが、それ以前にも弘前の白銀小学校には、比較的多くの女子児童が在学していた(9)。また明治八年には、含英女小学、白銀小学の二校が開校した。さらに前述したように明治一一年から一八年にかけては、青森県の女子師範学校も弘前に設置されていた。

（2）私立教育のはじまり——東奥義塾小学科女子部

以上の公立教育にたいし、弘前の女子私立教育は冒頭で述べた旧藩校の後身である東奥義塾小学科内に設置された女子部を中心として、キリスト教の影響を受けつつ発展した。『文部省年報』および東奥義塾沿革資料である『東奥義塾一覧』によると明治八年から一四年までの東奥義塾の女子生徒数は、おおむね七〇名から一〇〇名程であった。その内容についての手がかりは、インディアナ州で発行されていたグリーンキャッスルバンナー紙に掲載されたイング夫人（Lucy Ing, 一八三七—一八八一）の書簡の中に見出すことができる（Ing,Mrs."More from Japan." *Greencastle Banner*, August 5 1875 など）。たとえば明治八年（一八七五）六月一五日付の手紙には、二〇人ほどの女の子たちの習字の学習を次のように伝えている。

> 先日、女の子たちの授業を見に行きました。（中略）二十人の女の子たちが、大きい子も小さい子もそれぞれの低くて広いテーブルについていました。ちょうど習字の時間で、二人の先生から教えてもらいながら、筆で何やら不思議な文字を書いていました。（中略）この子たちは、本当に嬉しそうです。若い先生と、年配の先生、二人ともとてもすてきな装いの、女性らしいしとやかな方々で、生徒と同じように裸足です。(10)

このように、東奥義塾の女子教育も当初は手習から始まったことがわかる。やがて、イング夫人自身、こどもたちに英語を教えるようになった。明治一〇年三月一三日の手紙では、「現在、学校の生徒数はおよそ三〇〇名です。二五名の新しい女生徒が英語の勉強を始めました」(11)と伝えている。彼女はその他裁縫や編み物も教えた。生徒はみな、行儀も良く上達も早かったようである(12)。ただし、当時の女性たちの早婚の風習は、イング夫人を驚かせ、心配させた。

> この少女たちの一人は、まだ一六才なのにもう結婚して三～四年にもなります。彼女の夫はこの学校の教師で、英語がよくできる人です。この早婚の習慣は、特に彼女たちの教育にとって大きな障害になっています。私が編み物を教えている女の子の一人は、一五才ですが、同い年の男の子と結婚しました。(13)

ここに出て来る「一六才なのに結婚して三～四年ほど過ぎた女性」とは、年齢及び東奥義塾に残された写真から、岩手県出身の脇山つやではないかと察せられる。脇山つや自身は、東奥義塾でイング夫人から学んだ後、同校教師となり後進の指導にあたった。その教育思想は、明治一〇年にキリスト教雑誌である『七一雑報』に彼女自身が投稿した文章から推し量ることが出来る。つやは人間同士の戦いよりも人間にとってさらに大きなものは、智の戦い＝学と心の戦い＝教があるとし、次のように論じる。

> 学は勝ちて以て智力を励まし職業を博し放恣遊蕩を駆逐するの策略なり、教は以て悪を圧し善を擒にし、忠実方正に服するの活力なり。(14)

「学ぶ」ということに真摯に対峙する姿勢を見せており、女性は家事に堪能であればよいという価値観とは、かなり趣が異なった内容である。明治一一年に東奥義塾で教えていた女性がこのように述べていることは、当時の東奥義塾女子教育の一端を垣間見せて興味深い。当初は手習いから始まったにせよ、東奥義塾の女子教育は、メソジスト派宣教活動に携わっていたイング夫人の影響もあってか、キリスト教的人権主義の影響を受けた内容になっていたものと推察される。

こうした、当時としてはきわめて開明的であった東奥義塾小学科女子部は、学校体制の変更にともない、明治一五年に廃止となった。弘前における女子の私学教育は、次に述べるように、明治一五年に函館に開かれた遺愛女学校に受け継がれることになった。

(3) 函館遺愛女学校から来徳女学校へ

明治七年(一八七四)一月に宣教師M・C・ハリスの着任で函館での伝道活動を開始したメソジスト監督教会は、明治一五年二月一日に遺愛女学校(Caroline Wright Seminary)を開設した。しかしキリスト教主義の同校が生徒を集めるのは容易ではなく、弘前まで出張して生徒を集めるという状態になった。当時の弘前は東奥義塾小学科女子部が廃止された頃であり、遺愛女学校には弘前から多くの女生徒が進学した。第一回と第二回の卒業生はすべて弘前出身であり、第三回から第十回までの卒業生も弘前出身者が多かったと伝えられている(15)。同校で教鞭を取ったハンプトンは、明治一九年七月二〇日付の書簡で、夏休みに入ったとき、寄宿生の大半が津軽海峡をわたったと伝えており(16)、相当数の生徒が本州出身であったことを窺わせる。遺愛女学校の第一回卒業式は明治二三年六月で、卒業生として珍田みわを出し、九月九日の第二回卒業式には山田(高谷)トク、中野ウメの二人が卒業した。この三人とも弘前出身であった。そのうち、山田と珍田は、帰郷後弘前女学校で教師をしている。彼女たちが函館で受けた教育は、そのまま弘前に受け継がれるということになったのである。

(4) 来徳女学校から弘前遺愛女学校へ

こうして弘前から函館まで多くの女性たちが学びに向った状況に対応するため、明治一九年(一八八六)六月二五日、本多庸一などメソジスト派の人々によって、弘前教会堂内に来徳女学校が設けられた。ただし、この学校は当初日曜学校のような形態をとっていて中には男子生徒も交じっていた。位置づけとしては函館の遺愛女学校の分校という形であり、遺愛女学校の教師が弘前を訪れて指導にあたった。明治二〇年には弘前遺愛女学校と改名している(17)。弘前遺愛女学校での教育についての具体的な記録はきわめて少ない。ただ、当時教師であった成田らく(18)が自らが学んだノート類を残していて、わずかながらの手掛かりとなっている。

成田らくのノート類は、算数、物理、英語、歴史、作文、小学女礼式、教育指導法など、様々な科目にわたるが、なかでも興味深いのは、英語の学習帳である。らくは、「パーレーの万国史(*Universal History, on the basis of geography*, New York: Ivison, Blakeman, Taylor & Co.,1870)」に取り組んだらしく、同書の頁を追っていねいな単語帳を作成していた。この「パーレーの万国史」は、当時の日本で広く使われた本であるが、日付から判断して、明らかに弘前遺愛女学校に教師として就職した後に書かれたものである。おそらくこれは、らくが教えたというよりはらく自身が学んだものと推察されるが、弘前遺愛女学校での学習方法や教師の水準を推し量ることができるものとなっている(19)。

(5) 弘前女学校開校

弘前教会の会堂内に開校した学校は、やがて校舎やカリキュラムをそなえた本格的な学校へと発展していった。明治二一年(一八八八)六月、藤崎の酒造家であった長谷川誠三が中心となり、女学校設立の趣意書を発表、建築資金獲得に向けて動き始めた(20)。翌二二年四月二九日にはメソジストの伝道会社と契約し、教育の基礎をキリスト教主義に置くこととした。次いで五月二二日に「弘前女学校設立願」を県庁に提出し、六月二五日青

森県初の本格的女学校としての弘前女学校が開校した。その目的として掲げられたのは、「知徳並進を旨とし女子に高等及普通の教育を授け善良にして有用なる婦人を養成する」(21)ことであった。

開校当時は尋常小学科と高等小学科、本科を設置し、小学科は各四年、本科は三年の課程となっていた。現在残されているカリキュラムを見ると、高等小学科から英語が週に五時間配置され、本科では六時間となっている。さらに、読書作文にも力を入れ、本科の「作文」の時間では、「記事文」や「論文」を書くことになっていた。数学が週に四時間あるわりには、家政関係の科目は二時間で少ない。理科関係も二時間となっている。また、『弘前女学校歴史』に当時の教科書名が掲載されているが、「編輯人」部分に、「カットル氏」(生理書)や「英スウイントン氏」(万国史)など、カナ表記で書かれているので、おそらく英書を使ったのではと思われる。これらの書籍は、同じ弘前の東奥義塾で使われた書籍と同じものであり、借用したものとも察せられる。いずれにせよ、前述の成田らくが『パーレーの万国史』を読んでいたことなども考え合わせると、女子教育ながら、ある程度英語に力を入れる教育環境であったと見てよいと考えられる。多少時代が下がるが、明治三四年七月二六日に挙行された「弘前女学校新築落成式」においても、英語の唱歌に加えて、生徒総代の山形サイが英語で答辞を述べている(22)。男子の中等教育と女子教育とは、かなりその水準に差があった時代であったことを考えると、弘前女学校の教育水準の高さが理解できる。

指導にあたった教師の陣容を見ると、校主に長谷川誠三、教頭を欠くが、副教頭として本多テイ、教員の筆頭に前述の成田らくの名前がでている(23)。本多テイ、旧名長嶺サダも、東京女子師範学校で学ぶなど、当時の女性としてはもっとも高度な教育を受けた優秀な女性だった。開校当初の様子を、メソジスト派から派遣された学校長ハンプトン(M. S. Hampton)は次のように伝えている。

(前略)生徒の数は六八人で、平均年齢は一〇才から一二才です。彼女らはとても興味深い子供たちで、学業に関心を持っています。そのうち九人は教会に受け入れられており、平均六〇人位の生徒が教会や日曜学校に出席しています。女性の教師が六人おり、すべて、私たちの女性海外伝道教会から支払われています。(中略)この学校は、初級コースが四年、中級コースが四年、上級コースが三年になっています。二人の生徒が、この夏に上級に進みました。この学校を、なんとかうまく運営していきたいというのが私たちの考えでもあり、願いでもあります。この学校は日本人のものだし、彼らによって支えられるものです。そして私は、個人的には、彼らが彼ら自身で学校を支えていけるようになれば、どんな不便なことでも耐えていくつもりでいます。授業料は、その学年に応じて、月に一〇、一五、二〇銭となっています。(24)

こうして弘前女学校はスタートした。明治二二年の開校から約一〇年後に青森県立第一高等女学校が弘前に開校するまでの間、同校は県内で唯一の女子中等教育機関となった。冒頭で述べた通り同校出身で近隣小学校の教師として教鞭を取る者も多かった。青森県内は全般的に女子就学率が低かったことは前述したが、その原因の一つと考えられていたのは、女性教員の不足である。既に述べたように、青森県女子師範学校が、比較的短期間で閉校となった後は、明治三二年に青森県尋常師範学校講習科で女子生徒を受け入れるようになるまで、青森県には公立の女子教員養成期間がなかった。弘前女学校は、公立の女子中等教育体制が整うまでの間、地域に貢献する人材育成の場であったのである。

2　明治三二年弘前女学校卒業論文

(1)明治三二年卒業生をめぐる学習環境

次に、これまで述べた弘前での私立女子教育の一つの成果として、弘前女学校生の「卒業論文」を見ていきたい。本稿では「明治三二年卒業論文」を対象とするが、それに先立って、明治三二年卒業生を巡る学習環境について述べる。

明治二二年(一八八九)に開校した弘前女学校は、その後何度か学則を改正した。明治二六年に最初の学則改正を行い、予科四年、本科二年の課程とした。また、編物や裁縫などの「女工科」科目履修を希望する

生徒を「撰科」生として受け入れ、唱歌や女礼も教えることとなった(25)。ただし、修業年限は明記されていない。何年在学するかは、本人の希望だったようである(26)。この学則改正では、使用されている教科書の一覧表から、前述の「カットル氏」(生理書)や「英スウイントン氏」(万国史)などの書名は消えている。かわりに「佳氏生理書」として著作者「柳原新一郎」との日本人名が出てきている事から(27)、「カットル氏生理書」の邦訳を入手して使った可能性は考えられる。この学則のもとで、本科生は、修身(週二時間)、英語(週三時間)、国語漢文(週五時間)、算術(週五時間)、家事(週二時間)、歴史(週二時間)、生理(週一時間)、習字書学(週二時間)、体操唱歌(週一時間)、女工科(週八時間)、付加科(週二時間)、の科目を学んだ。最後の「付加科」とは、聖書の購読である。この学則は三四年に再度改定となり、尋常小学校四年、予科二年、本科五年、及び裁縫専修科四年のコースが設置されている。

教育の責任者にあたる学校長も、比較的短い任期で交代した。明治三二年の卒業生が学んでいた頃は、第七代校長ヒューエット(Ella J. Hewett, 一八五〇―一九二七)の時代だった。ヒューエットはミシガン州出身、明治一七年に来日して、明治二二年まで函館遺愛女学校の校長を務めた。一旦帰国した後、明治三〇年に再来日、弘前女学校校長に着任し、明治三四年までその任にあった。明治三四年から再度函館遺愛女学校に赴任した後、明治三六年に仙台で手芸学校を設立し、校長を務めている(28)。日本人教師との折り合いもよく、生徒の信頼を集め、新築校舎を落成させるなど、弘前女学校の発展に大きな貢献を残した。離任に際しては生徒たちから惜別の謝辞を贈られている。

ヒューエットが着任したのは明治三〇年一一月だが、同校は明治三一年三月に卒業生をださなかったので、明治三二年の卒業生たちは、ヒューエット着任後に初めて送りだした生徒だった。現在残されている「弘前女学校卒業論文集」は、三二年～三四年の卒業生のものであり、ちょうどヒューエットの在職期間に符合している。またもう一冊残されている「玉璞」は、卒業論文集としてではなく、本科四年生による論集の形をとっているが、明治三四年一一月のヒューエットの離任後まもなく書かれていると推察できる。

明治期弘前女学校の歴史の中で、まとまった論文集が残っているのは、明治三二年から三五年にかけてのみである。しかも、この論文集は各年度ごとに一つのテーマについて全員がそれぞれの考えを述べるという形式をとっており、基本的方向性は同じである。他の年次で書かれた文集が紛失された可能性が全くないとは言えないが、論文集がきちんと製本されて残されている状況などを鑑みると、このヒューエットが在職中のみ「卒業論文集」がまとめられたと見る方が自然ではないかと思われる。すなわち、この論文集の成立そのものが、当時の学校長であった女性宣教師ヒューエットの影響であった可能性は十分に考えられる。

ヒューエットが書いた女性宣教師の年会報告書(29)によると、明治三一年当時、春期は八時の学校開始で、本科の生徒は土曜日を除くと四時まで授業があった。土曜日は一二時までである。朝の第一時間目は全校生徒が集い、本科の生徒には聖書の講義があった。水曜日は中田牧師が本科生と初級の生徒と交代でお話した。土曜日が本科生が三グループに分かれて、祈祷の時間を持った。生徒も教師も極めて熱心であり(30)、寒くても、吹雪の日でも、出席はきわめて良好だった。なかには二、三マイルもの距離を深い雪をかき分けて通ってくる生徒もおり、学校の生徒数も増加した。良好な教育状況下にあったものと推察される。

(2) 明治三二年卒業論文集

次に、こうした環境下で作成された明治三二年(一八九九)の卒業論文について見ていきたい。

この論文集は、各自の最初の頁に「卒業論文」とのタイトルがあり、生年月日、氏名、学年、引用書目が書かれている。同年の卒業生は八名だが、論文が残っているのは七名である。そのうちの六本に「本科四年生」と明記されている。前述したように弘前女学校の場合、開校時に本科三年の課程を設置し、明治二六年の学則改定で本科は二年の課程だっ

た。三四年に二度目の改定が行われたとき本科は五年になったとされている(31)。こうした記録と、明治三二年の卒業生の「本科四年生」という記述は矛盾する。学習期間に関しては、中田しげの「緒言」の中に「苦学数年」とあるだけで、具体的に彼女たちが何年学んだかということはつかめない。記録に残されていないだけで、明治二六年以降なんらかの学則改定があった可能性も考えられる。なお、唯一「本科四年生」とついていないのは、小山内たかの論文だが、彼女は「緒言」部分に「余二年間の学業を修め今やこの校を出んとする」と明記しており、小山内たかの学習期間は二年間だったことがわかる。

弘前女学校の論文集は、各年度ごとに共通のテーマがあり、それに関して各女生徒が小テーマをあげて、約一五〇字から二〇〇字ほどの単文で意見を述べる形をとっている。明治三二年の共通テーマは「自警十二則」で、七名の女生徒たちが、これから社会に出るに当たって自分を戒めるための十二のテーマをあげ、自分の考えを書いた。この明治三二年卒業論文集には、他の年次と違って教師の指導も記入されており、これによって、教師がどのように指導したのか、その指導方針が浮かび上がるものとなっている。それは次のようなものである(32)。

「行文雅味アリ、着意亦凡ナラズ。但東北ノ語弊ニ陥レルトコロ三、四、惜ムヘシ」（安藤論文評価より。以下、〇〇論文と表記）
「言語諄々、着意真実以テ自ラ平生ヲ警ムルニ足ル」（中村論文）
「意気軒昂、筆端鋭利、世ノ柔弱男子ヲシテ恥死セシムルニ足ル。乞フ之ヲ和クルニ婦徳ヲ以テセヨ。蓋し君深ク当今ノ時勢ニ慨スルトコロアリテ然ルナランカ」（葛西論文）
「用語余リニ井々恐クハ自作ナラサル箇所多カラン。然レトモ見識ノ斬新ナル喜ヘキモノ少カラズ」（木村論文）
「着意一方ニヘ偏スト雖トモ言々肺肝ヨリ出ヅ一読ノ価アリ」（小山内論文）
「用意周到なれども自己の考案と自己の筆に成れる分の甚た少きを見る」（今泉論文）
「同主意ノ箇条四ツアリ十二則ニ足ラズ」（中田論文）

一見すると「着意」や「見識」の斬新さが評価の一つのポイントになっている。それに加えて重視されているのは、自らの言葉で語ることだろう。見事に書いてあっても、自分の言葉でなければ評価されるわけではない。さらに文体については、雅な文章が望ましく、柔らかく表現する「婦徳」も必要という、当時の指導が浮かび上がる。

こうした中で書かれた明治三二年卒業論文集から、紙数の都合で、氏名、引用書目と各自が「自警十二則」として掲げた各テーマのみを以下に紹介する。

弘前女学校卒業論文（明治三二年）

〇安藤みつ（明治一六年一月生、本科四年生）

引用書目　末松修身女訓　徒然草、漢文入門

緒言

一、朝ハ四時に起き出ること
二、夜ハ八時にふしねむること
三、ねむるきはたすかに明くる日のなすべきわざを定めまた休む時をも明らかに定むべし
四、一日のわざは一日になし終るべし
五、机にむかひたらんにハまづかたちをなほくととのふること
六、わけて主に文を読む時にハ一心専念たるべきこと
七、人と語るに三つは二ツ五ツハ三ツとすべし
八、漫りに人のうわさすべからず
九、定めたる遊び時の外ハ余り時なりとも妄りに費さずして何ごとかなすべし
一〇、仇なる思は心よりとりのくべし
一一、悲またハつぶやき何にても目出からぬ心起らばすぐさま聖書をひらきみるべし
一二、心に定めたることハ必ずふミ行うこと

○中村トシ（明治一七年九月生、本科四年生）

引用書目　修身談叢、新約聖書、国民錦嚢　漢文入門、徒然草

緒言

一、妄りに言をはくことなかれ
二、事に当りて熱心に勉強すべし
三、目的を一定せよ
四、長者の言は捨つべからず
五、欲を慎め
六、恒に感謝を忘るべからず
七、智を持つべき事
八、光陰を惜むべき事
九、忍耐を守るべき事
一〇、謙遜なるべきこと
一一、常に真実なるべし
一二、愛を忘るゝことなかれ

○葛西きえ（明治一六年三月二六日生、本科四年生）

引用書目　金諺一万集、家庭雑誌、貴女用文五千題

緒言

一、礼儀を重ずべし
二、節倹を守るべし
三、身体の衛生に注意し天禀の命を全うせよ
四、正義のためにハ身をも忘れよ
五、確古不抜の精神を失ふこと勿れ
六、忍耐を着よ
七、世の光となるべし
八、恒に心中に愛を満たせ
九、己が業務を執る前先づその順序を定め然る後之を執行すべし
一〇、寸蔭惜しむべし
一一、主のためはげめ
一二、人の罪を免すこと極めて速なれ

○木村きよ（明治一五年生、本科四年生）

引用書目　家庭雑誌、婦人新報、基督信徒ノ義務

緒言

一、常ニ清潔ヲ怠ルベカラズ
二、志ヲ専一ニスベシ
三、安息日ヲ清ク守ルコト
四、神ヨリ受ケタル恵ハ必ズ人ニ語ル事
五、小事ニ忠信ナルベシ
六、喜テ慈善ヲ行フベシ
七、明日アリト思フコト勿レ
八、愛ハ忍ブコトヲナス
九、矯風事業ニ力ヲ盡スコトヲ怠ルベカラズ
一〇、誠実ナラザレバ云フベカラズ
一一、全身中最モ慎ムベキハ舌ナリ
一二、一日ノ生活怠ルベカラズ

○小山内たか（明治一五年生）

引用書目　貴女の薬、女礼式

緒言

一、常に神に近づくべし
二、修身の事
三、礼儀を正しくすべし
四、恭倹を守るべし
五、言語を慎むべし
六、義務を全ふすべし
七、常に怠らず学問を勉強すべし
八、衛生の事
九、交際の事に就て慎むべき事
一〇、父母にたいする務を怠るべからず

一一、節倹を守るべし
一二、家事を整頓すべし

○今泉きよみ（明治一六年二月生、本科四年生）

引用書目　少年文集、徒然草、家政学、女礼式

緒言

一、孝道を第一とす
二、詞遣ひを慎むべき事
三、我が身を省り見るべき事
四、身体の健康を保持すべき事
五、天職を全ふすべき事
六、礼儀を重んすべき事
七、光陰矢の如し
八、節倹を守るべきこと
九、記録を怠るべからさる事
一〇、常に温良なる心情を養ふべき事
一一、家庭慣行を正しくする事
一二、一度心ざしを立てし事は挫かさるべし

○中田しげ（明治一七年三月二六日生、本科四年生）

引用書目　新約全書、家庭新誌

緒言

一、常に心を清くすること
二、常に愛心をもつべし
三、同情の心を以て人と交わるべし
四、多言すべからず
五、何時も正直なるべし
六、慈仁の心なかるべからず
七、一日の業務を怠らずして務めよ
八、如何なる事ありとも不善にくみすべからず
九、己れの智恵力をたのむべからず
一〇、キリストを見て進むべし
一一、忍耐の心なかるべからず
一二、めくみの心なかるべからず

各生徒がどのような問題意識を持っていたかが伝わる。各テーマにおいて論じられている内容は必ずしも単純ではなく、いくつかの内容が合わさった複合的なものも多いが、おおまかな特徴として、以下の五点をあげうると思われる。

①日々の生活習慣的内容

日々の生活を規則正しくすること、衛生や清潔、健康保持に関することなどである。「衛生」や「清潔」をテーマとしている生徒も三名いる。現在ほど衛生観念が行き渡ってなかった時代背景(33)を考えると、当時としては先取的な感覚だったと思われる。

②日常の生活信条的内容

長者の言を聞く、忍耐を守る、節倹を守る、小さなことを大事にする、今出来ることは延ばさない、てきぱきと動き時間や日々の生活をムダにしない、家事を整頓する、義務を果たすことなどである。

③人間関係に関する内容

謙虚であること、礼儀を大切にすること、欲を持たないこと、仇なる思いを持たないこと、人を許すこと、言葉を慎むことなど日常の交際に関わる内容があげられる。

④学問や目的実現に関する内容

智を持つべきこと、きちんと机に向うこと、一心専念に読書すること、光陰を惜しむことなど、熱心に学問や勉強に取り組むことを重視する内容は多い。また、一度決めたことはやり通す、天職を全うすることなど、強い信念を表明するテーマをあげた生徒は七名中六名である。

⑤キリスト教の教えに触れる内容

この学年の本科生は全員洗礼を受けていた。また前述のヒューエットの報告書にあるように、毎日のように聖書に触れる機会があった。その効あってか、日々聖書に学ぶことの大切さについても、七名中六

名があげている。信仰の強さを窺わせる。

以上の中から、更に興味深い視点を二点あげておきたい。一つは、女性であっても社会の一員であり、学問研究に取り組むべきだという意識がある点である。特に「天与の職を全うする」という発想がでていることが、きわめて興味深いと思われる。「天与の職」の示す範囲を考慮する必要はあるが、やはり女性の自己実現や自立へつながる考え方とみるべきであろう。もう一つは、「言葉を慎む」ということへの強い意識である。「言葉を慎む」ことに関して、表現を変えて二つのテーマで論じるケースもあり、彼女たちにとっていかにこれが大きな問題であったかが伝わる。こうした内容が一切含まれていないのは、葛西きえ論文だけである。前述したように、指導した教員も、「自らの言葉で語る」ことに評価の重点を置いていた。しかし、その一方で、葛西きえの、「言葉を慎む」という発想があまり含まれていない文章にたいしては、婦徳の必要性を指導しているのが、当時の教師の指導立場を示して興味深い。その葛西きえの文章は、たとえば次のようなものである。

「確古不抜の精神を失ふこと勿れ」

今やわが国世界の文明国として万国と交際するときに当りてもなほ、依然として男尊女卑の弊を存するは、如何なる故ぞ畢竟するところ女子の志操の不定なるより他ならず、いやしくも明治の御代に生き、新日本の空気を呼吸せる女子たるもの、その志操あたかも菊のごとくその秋陽にあぶり深霜に傲り幽姿粛々たらんことを要す

男尊女卑の風潮に義憤を抱く当時の女生徒の心情が伝わる。葛西きえは、「わが品位を高め天与の職を全うし社会の一婦人とじて清き生涯」を送ろうとの意志を持って、「自警十二則」を表した旨を冒頭の「緒言」に書いている。なかなかの意気込みが今に伝わる。

(3) 三二年卒業生のその後

こうして弘前女学校に学んだ七名を含む本科生八名、専科生三名は、明治三二年(一八九九)三月二四日、第八師団建築技師本間俊平の祝辞も得て、無事卒業の日を迎えた(34)。この一一人は聡明で全員がクリスチャンであり、学校長ヒューエットにとって、自慢の生徒たちであった(35)。ヒューエットの報告書によると、彼女達は卒業後、何名か学校に残った(36)。そのうちの三名は教師としてであった。『弘前女学校歴史』巻末掲載の「創立以来の職員氏名」と「弘前女学校卒業生名簿」から判断すると、学校に残った三名は本科生の木村きよ、専科生の服部すえ、早川としである。また、残りの生徒は、「特別なレッスン(special lessons)」を受けるものもいれば、上級学校に進学するものもいた。この時の卒業生のうち、小山内たかと葛西きえについては、和徳尋常小学校資料中に名前を見いだすことができる(37)。小山内たかは和徳尋常小学校に明治三三年五月二日に初の雇教員として採用になった。一年ほど勤務した後、明治三四年三月三一日付で小山内たかは解雇となった。理由は師範学校講習科進学のためだった。その後の小山内たかの進路は不明だが、昭和三七年発行の『弘前女学校歴史』中の「弘前女学校卒業生名簿」では関東州金州南金書院女子部と記載され、旧姓のままである。

また、葛西きえについては、和徳尋常小学校の学校日誌(38)およびメソジスト派の機関誌の中に、もう少し足跡をたどることが可能である。葛西きえは、小山内たかの後を継いで、明治三四年四月一日に代用教員として雇用された。担当は三学年女子四三名であった。採用されてまもない七月二六日、きえは、学校を早退して母校弘前女学校での落成式に出席した。ここできえは卒業生総代で祝詞を述べている(39)。この時のスピーチは彼女が弘前女学校で学んだ一〇年間にわたる生活についてのもので、在学中外国人女性宣教師から非常に大きな恩恵をうけたことを、ユーモアを交え、かつ、時には切々と語り、居合わせた人々の心に強い印象を残したと、宣教師文書は伝えている(40)。八月には、二四日、二八日と続けて受け持っていた生徒が病でなくなったときは、クラスの生徒を引率して葬儀に出席した。一二月二〇日付けで代用教員から准教員になった。翌三五年度は四学年女子担当となり、年度末の二月二七日には弘前市内の第一大成尋常小学校を参観する機会も得た。三六年度には、二学年女子担当となり、給料

も昇給した。三七年度は三学年女子担当となり、九月にきえの父が亡くなったときは、受け持ちの生徒が葬儀に出席した。三八年頭には賞与も出て、三八年八月一八日には市長の命により青森県教育会の体操遊技講習会に出席、帰校後は、同僚職員に講習内容を伝授した。三九年一月一六日には、学校内の教授内容を批評する機会も与えられている。

順調に教師としての実績をつんだかにみえる葛西きえだが、無理をしたのか、病に倒れた。三九年四月の年度当初に、「助膜炎」(41)で欠勤することが記載され、五月には欠勤届が診断書とともに提出されている。三月五日より六月三〇日までの長期欠勤となり、七月二日にようやく出勤した。しかし、全快ではなかったようである。明治四〇年度、二学年女子担当に決まっていたものの、四〇年五月四日、病気退職願を提出、五月一一日付をもって退職となった。

その後の葛西きえの足取りはわからない。前掲昭和二七年の「弘前女学校卒業生名簿」では、この世を去ったことが記されている。長くても四〇代半ばまでの人生ということになる。名前も旧姓のままである。男尊女卑の風潮に疑問を持ち、理想を掲げて社会人として天与の職をまっとうしたいと論文に書いた葛西きえは、おそらく多少の無理をしてでも、卒業時に誓った生き方を貫こうとしたのかもしれない。そして、男性中心社会であった学校現場で職業婦人として働く事自体、さまざまな葛藤を伴うものであった可能性も否定できないだろう。短い人生であったことが惜しまれる。

おわりに

本稿では、東奥義塾小学科女子部から弘前女学校へいたる私立女子教育の流れと、その教育成果の一つと目される弘前女学校生卒業論文集の中から、明治三二年(一八九九)の論文集を中心にみてきた。当時の女子教育の水準、指導方針、個々の女生徒の意識やものの考え方などは、多少なりとも明らかになったと思われる。そこでは、いわゆる「良妻賢母」教育とは一線を画した、女性の自立につながる教育が進められていたと見受けられる。キリストの教えを伝えることを根本目的とした女性宣教師たちも、日本人のおかれた状況に配慮しつつ生徒の教育に取り組んでいた。そこで学んだ生徒たちは、自分の言葉で考えることを重視する指導を受けていた。そして彼女たちの中には、伝統的な「婦徳」の価値観に加えて、「天与の職をまっとうする」という考え方も生まれ、この二つの考え方の間で自分自身の生き方を模索したようにも見える。こうして学んだ女性たちが教職に就いた時、その生き方が幼い小学生に与える影響も少なくはなかったと察せられる。

繰り返し述べたように、明治三〇年代前半までの弘前女学校は、津軽地方で唯一の女性教師育成機関だった。葛西きえや小山内たかのように実際に教師として働いた卒業生の動向を見ても、同校でのカリキュラムや教育体制は教師として働く女性を育てるのに十分機能していたと考えられる。その意味においては、同校の存在は津軽地方において十分に意義あるものであったことはいうまでもない。

しかし、明治三二年卒業論文を見てくると、こうした教育体制に加えて、この弘前女学校に教師として着任したアメリカ人女性宣教師の生き方そのものが及ぼした影響力も見逃す事はできないように思えてくる。実際、葛西きえが卒業後のスピーチで外国人女性宣教師から大きな恩恵を受けたと語ったことは前述した通りである。ヒューエットをはじめとして、同校の女性校長のほとんどは、はるばるアメリカから単身来日してきた独身の女性宣教師だった。いわゆる「良妻賢母」を目指すだけではなく、自らの信念に基づいて天与の職を全うする、こうした生き方が、女性としての生き方を考えるもっとも身近なお手本として多感な少女たちに与えた影響は、決して少ないものではなかっただろう。実際、明治七年に弘前に来たイング夫人は、少女たちの早婚の風習を憂いたが、弘前女学校が開校して六年後には、同校で学ぶと婚期が遅れる、あるいは結婚そのものさえ望みがなくなるとの見方が市内にでてきたことを、女性宣教師が報告している。それだけ、同校卒業生の中で結婚を選択しない人が増えていた(42)。こうした、教科指導の枠を超えた女性宣教師の生き方が与えた影響力もまた、弘前女学校が果たした役割として考える

ことが可能なのかもしれない。そしてメソジスト派の影響下で進んだこれらの女子教育は、明治期の日米交流史の中での文化受容の側面を持つ事は言うまでもない。それはすなわち、明治初期から西洋文化摂取に熱心だった津軽地方の在り方が生み出したものでもあったのである。

註

(1) 東奥義塾についての詳細は拙著『洋学受容と地方の近代』(岩田書院、二〇〇二)を参照のこと。

(2)『弘前女学校歴史』(弘前女学校、一九二七)七三頁。

(3) 弘前女学校に関する研究としては、『弘前学院百年史』(弘前学院、一九九〇)の他、坪田庸子『津軽地方の女子教育――弘前学院を中心として』(路上社、一九九九)や、『弘前市教育史』の弘前女学校部分の記述などがあげられる。

(4) この明治三〇年代の論文集とは、明治三二年から三四年までの「卒業論文集」と明治三五年の本科四年生によって執筆された論文集「玉璞」である。これまで、筆者は一九九九年度に青森県から刊行された『青森県女性史――あゆみとくらし』近代編を担当した際にこれらの史料を閲覧し、若干の研究においてその一部を紹介してきた(『青森県女性史――あゆみとくらし』(青森県、一九九九)より、「第二章産業社会の発展と女性の社会進出」)、「弘前女学校の音楽教育」『弘前大学教育学部紀要』(弘前大学教育学部、一九九九)七六～九五頁などである。また、『青森県史資料編』近代2にも、一部を史料紹介の形で掲載した(「第8章第1節学校教育体制の成立」、「第10章第1節新旧の宗教と宗教政策」)。そのほか青森県女性あゆみとくらし研究会において、真島芳恵氏が公立女学校の校友会史との比較検討のための史料として一部を活用されている。(作られた「良妻賢母」――青森県女性のケースを中心に」『あゆみとくらし』第七号、青森県あゆみとくらし研究会、二〇〇二、九)

(5) 弘前女学校の沿革資料としては、創立から四〇年を経て昭和二年に刊行された『弘前女学校歴史』があげられる。

(6) 弘前女学校はメソジスト派から派遣された女性宣教師が校長に着任した。この女性宣教師たちが、メソジスト派の年会などで報告した文書に、キリスト教の布教状況に加えて、弘前女学校の状況も述べられている。

(7) 本稿では、明治六年設立の和徳小学校の学校日誌や諸記録を活用する。なお、同校は幾度か校名変更しているが、本稿で参照したのは、明治三〇年代の和徳尋常小学校時代のものである。

(8) 県内の就学率に関しては『青森県教育史』(青森県教育委員会、一九七二)が詳しい。

(9) 拙稿『青森県女性史』(青森県、一九九九)第1章参照のこと。

(10) 原文は拙著『洋学受容と地方の近代』(岩田書院、二〇〇二)一四八頁参照。

(11) The school now numbers about 300; 25 new girls begin English." Education in Japan. An extract from Mrs. Lucy Ing's letter of March 13, 1877." *Greencastle Banner*, May, 17 1877.

(12) " Letter from Japan, by Mrs. Lucy H. Ing." *Greencastle Banner*, Feb. 1 1877.

(13) One of these girls has been married three or four years and is about 16 years of age. Her husband is a teacher in the school, and reads English well. Their early betrothals and marriages are a great drawback to the education of the girls especially. One of my knitting girls, of 15, is just married to a boy of the same age." Education in Japan. An extract from Mrs. Lucy Ing's letter of March 13, 1877." *Greencastle Banner*, May. 17 1877.

(14)『七一雑報』(明治一〇年七月二〇日)八頁。『復刻版七一雑報』第二巻(不二出版、一九八八)二三二頁。

(15)『遺愛女学校創立五十年略史』(遺愛女学校、一九三二)一五頁。

(16) 本多繁『続・米国のプロテスタンティズムと日本人』(明治プロテスタンティズム研究所、一九九四)七七頁。

(17) 前掲『弘前学院百年史』七三八頁

(18) 成田らく（一八七〇―一九四五）は弘前藩士族の娘として西津軽郡山田村に生まれた。明治一〇年一月から一五年九月まで山田小学校で学んだ後、明治一八年三月に青森県女子師範学校入学、わずか二ヶ月後の五月に卒業した。在学期間がきわめて短いが、この師範学校は財政難のため五月八日に廃校となったため、それに伴う卒業だったことも考えられる。やがて、らくは明治二〇年九月に弘前遺愛女学校に就職した。同校離職日時は不明だが、明治二二年一二月一六日時点の職員表では、副教頭の次に名前が記載されている（『弘前女学校歴史』二六頁）。明治二四年七月二〇日に、明治一五年より成田家の養子となっていた珍田有孚の次男である正雄と結婚、その後は家庭に入り子育てに専念した。津軽出身の外交官として高名な珍田捨巳は義兄にあたる。

(19) 詳細は拙著「明治期東奥義塾関連洋書についての考察―ジョン・イング寄贈書を中心に―」（『弘前大学国史研究』一一七号、二〇〇四、九一～一〇六頁）参照のこと。

(20) 以下、設立に至る経過は、前掲『弘前女学校歴史』に基づく。同書、八～一二頁参照。

(21) 前掲『弘前女学校歴史』一四頁。

(22) 同右、六四頁。

(23) 前掲『弘前学院百年史』三二～三三頁。

(24)『青森県史 資料編 近現代2』（青森県、二〇〇三）五九八頁。なお、同書の八〇九頁に原文も掲載されている。青森県史掲載の訳文は拙訳による。

(25) 前掲『弘前女学校歴史』三七頁。

(26) 前掲『弘前学院百年史』七九頁。

(27) 前掲『弘前女学校歴史』四三頁。

(28) ジャン・W・クランメル編『来日メソジスト宣教師事典 一八七三―一九九三年』（教文館、一九九六）一一六頁。

(29) *The Minutes of the Fifteenth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan*, 1898, p.22.

(30) 以下は三二年報告書による。*Sixteenth Annual Report, 1898-1899*, Japan Woman's Conference. (Methodist Episcopal Church) p.29.

(31) 前掲『弘前女学校歴史』一四～一五頁、三四頁、五八頁。

(32) 適宜句読点を追加した。

(33) たとえば、青森県の場合、出産を扱う産婆たちでさえ、衛生への関心は薄く、講習会が開かれるようになったのも二〇年代以降であった（前掲『青森県女性史』三二頁）。

(34) 前掲『弘前女学校歴史』四八～四九頁。

(35) *Sixteenth Annual Report, 1898-1899*, Japan Woman's Conference, (Methodist Episcopal Church) p.31.

(36) *Seventeenth Annual Report, 1899-1900*, Japan Woman's Conference, (Methodist Episcopal Church) p.29.

(37) このうち、小山内たかについては、明治期弘前の教育史を研究されていた千葉寿夫氏が、和徳小学校の歴史を描いた『小学校現場の百年』（津軽書房、一九七五、一九五頁）の中で「最初の女教員」として書いている。ただし、「本校最初の女教員小山内たかという人の経歴は明らかにすることができなかった」としている。

(38)「従明治三八年一月至同四二年三月　学校日誌　和徳尋常小学校」、「明治三二年ヨリ仝三四年マデ学校日誌　和徳尋常小学校」。

(39) 前掲『弘前女学校歴史』六四～六五頁。また前掲『弘前学院百年史』一〇二頁には、葛西キエの名前の下に（三二年本科卒業生）と記されている。なお、『弘前女学校歴史』巻末資料の卒業生名簿には、三二年本科卒業生としての「葛西きえ」の他、三四年にも「葛西キエ」の名前が見受けられる。三四年卒業生は卒業論文から本科生の氏名がわかるため、三四年の「葛西キエ」は本科卒業生ではない。明治三二年四月の *Tidings from Japan*, Vol.2-No.4（p.54）の新入生に関する記述で、卒業生がそのまま残ったと書かれていることや、本文で言及した通り、三二年卒業生の何人かが特別なレッスンのため学校に残ったとヒュー

エットが記述していることから、この三四年の「葛西キエ」は三二年の「葛西きえ」と同一人物で、本科卒業後そのまま勉学を続けたと考えられる。和徳小学校関連資料では、すべて「葛西きえ」の表記である。

(40) *Tidings from Japan*, Vol.4 - No.8, (David S. Spencer, editor and publisher, Aoyama Gakuin, 1901), p.98.

(41)「従明治三八年一月至同四二年三月学校日誌　和徳尋常小学校」では、「助膜炎」との記載になっている。「肋膜炎」のことかとも思われるが、他にも「助膜炎」で休んだ教員についての記載も見受けられる。

(42) Miss Georgiana Baucus, Principal., Miss Irene E. Lee, "Aomori District. Hirosaki, Hirosaki Jo-Gakko" *The Minutes of the Twelfth Session of the Woman's Annual Conference of the Methodist Episcopal Church in Japan*, 1895, p.40. 訳文は前掲『青森県史　資料編　近現代2』七四七頁参照。なお原文は同書の八〇三頁にも掲載されている。

付記　本稿は独立行政法人日本学術振興会科研費（18520507）の助成を得た研究成果の一部である。

（秋田看護福祉大学）

【日本思想史研究会入会のご案内】

弊会では、常時会員を募集中です。日本思想史のみならず、日本における知的営為に興味・関心のある全ての方に門戸を開いております。お申し込みの際は左記の要領にある事項をご記入の上、弊会事務局まで電子メイルないしは葉書でお申し込み下さい。折返し会費納入等につきご連絡致します。

記

①**氏名**（所属も明記願います）
②**住所／電話番号**（お持ちの場合は e-mail アドレスも）
③**ご専門あるいはご関心のある分野**
④**会費**　一〇〇〇円（年報および月例会案内が届きます）

〒九八〇―八五七六　仙台市青葉区川内二七番一号
東北大学大学院文学研究科
日本思想史研究室内　日本思想史研究会
電話・ＦＡＸ　〇二二（七九五）六〇六七
e-mail：admin_jih@sal.tohoku.ac.jp
郵便振替　一八一八〇―二六三七九三一

会員になられた方には、本誌の前身である『日本思想史研究会月例会会報』（一九九二年三月から二〇〇一年三月まで、全九巻一八号）をインターネット上で閲覧する特典をご用意しております。